# 俳句文学館

発行所
社団法人
俳人協会
東京都新宿区
百人町3−28−10
郵便番号160
電話 (03)367−6621（代）
発行人　草間　時彦
定価 100円（送料別）
（年 1,000円
送料 300円）
振替口座
東京6−273番

# 水原名誉会長逝く

## 88歳の天寿を全うし

俳人協会名誉会長、俳誌「馬酔木」主宰水原秋櫻子氏は病気療養中だったが、七月十七日午前三時逝去された。眠るような静かな臨終だった。二度の心不全を奇蹟的に乗り越え、自宅に療養中だった、今年になってからは調子もよく、見舞の来客や馬酔木門の俳人と話をすることが出来るようになっていたが、七月に入ってから急変し、今回のご逝去となったものである。明治二十五年生れ。十月九日が誕生日であるから八十八歳、数えでは九十歳であった。天寿を全うしての逝去というべきであろう。

## 馬酔木・協会合同葬

### 8月2日、青山

### 葬儀所で執行

### 10月17日に百日祭

十七日、午後より荻窪の水原家には各界の弔問客があいつき、たまたまその日、朝日新聞社で俳句欄の選句中だった大野林火会長は加藤楸邨氏とともに同家を訪れ、しづ子夫人、令息春郎氏に弔意を表した。

通夜は翌十八日午後七時から神式で行われ、山口青邨、中村草田男、山本健吉氏をはじめとして俳句関係者多数が参列した。通夜の途中から夕立となり、人々は、喜雨亭先生の通夜にふさわしいと語り合った。

本葬は馬酔木会俳人協会の合同葬として八月二日午後一時から青山葬儀所で神式によって行われ、告別式は午後二時から三時までである。そのために、十九日午後一時より水原家で密葬が行われた。内輪のみとのことであったが、伝え聞いた人々が多く集まって、同家周辺の道路を埋めた。長崎の下村ひろし氏、朝倉和江さんのような遠来の客、及川貞、滝春一氏らの高齢の弟子も元気な顔を見せた。

本葬以後の予定としては、十月十七日午後、俳句文学館で百日祭が挙行される由である。また、「馬酔木」六十周年記念式は予定通り十月三日に開催され、「馬酔木」は十月号を六十周年記念号、十二月号を追悼号とする予定である。

また、「俳句」などの綜合雑誌に追悼号を準備中である。

### 喪主水原春郎氏談

「皆さまにはいろいろとお世話になりました。なんの苦しみもなく、眠るような死でした。死ぬ一週間ほど前、なにか食べたいものはないかと申しましたら、鰻が食べたいと言って、少しでしたが、うまそうに食べました。胃腸が丈夫だったのでしょう。長い看病で、母が疲れているようなのが心配です。葬儀が終ったら、ゆっくり休んで貰うつもりです。」

### 堀口星眠氏談

「十月の六十周年記念会まではご健在でいて頂くつもりだったのですが、残念です。ご生前、自分にもしものことがあっても、六十周年の記念会は予定通り行うようにとのお言葉がありましたので、そのようにします。」

### 大野林火

### 俳人協会会長談

「残念でしたねえ。昭和三十七年から、五十二年まで、約十六年も会長をお願いして、俳人協会がこれだけ大きくなったのも、俳句文学館が出来たのも、みな水原先生のおかげです。」

## 俳人協会賞・新人賞・評論賞

# 選考委員決まる

俳人協会では六月六日、七月四日の理事会で俳人協会賞、同新人賞、同評論賞の各選考委員、予選委員の本年度の人選を行い、別項の通り決定、それぞれに委嘱状を発送した。

### 俳人協会賞選考委員

（◎委員長）

安住敦・◎大野林火・岸風三楼・草間時彦・香西照雄・後藤比奈夫・小林康治・沢木欣一・野沢節子・能村登四郎・平畑静塔・福田蓼汀・皆吉爽雨

### 俳人協会新人賞選考委員

（◎委員長）

井沢正江・上田五千石・岡田日郎・岸田稚魚・清崎敏郎・進藤一考・鷹羽狩行・◎成瀬桜桃子・原裕・深見けん二・古舘曹人・細見綾子・堀口星眠・松崎鉄之介・森田峠・吉田鴻司

### 俳人協会賞予選委員

（◎委員長　○副委員長）

青柳志解樹・石田勝彦・浦野芳南・大島民郎・岡本眸・神蔵器・古賀まり子・斎藤夏風・佐川広治・下村梅子・庄司圭吾・高田風人子・辻田克巳・中村明子・樋笠文・細川加賀・◎皆川盤水・宮津昭彦・○村田脩・山田みづえ・鷲谷七菜子

### 俳人協会評論賞選考委員

（◎委員長）

安住敦・清崎敏郎・香西照雄・◎沢木欣一・能村登四郎・平井照敏・平畑静塔・古舘曹人・松本旭・村山古郷

（各五十音順）

## 秋櫻子先生哀悼

### 村山古郷

七月十七日、水原秋櫻子先生が心不全のため亡くなった。満八十八歳九ヵ月のご生涯であった。

秋櫻子先生ほど、昭和の俳句界に大きな存在を示し、大きな影響を与えた人はいない。その人を失ったさびしさはいいようもない。それは秋櫻子先生がすぐれた俳句作者であったというだけではない。「ホトトギス」の4Sとうたわれた頃からの華麗な作風によるだけでもない。その華麗な作風が持つ意義、その華麗な作風が内包する問題、そしてその作風によって追求された俳句の近代性への志向こそが重要な意味を持つと考える。先生は昭和俳句界に、この俳句の近代化という新しい世界を切り開き、そこに大きな足跡を印した人であった。

昭和六年「ホトトギス」を離脱し、「馬酔木」に新興の旗幟（きし）を高らかに掲げられた独立は、温厚な秋櫻子先生が一生一度の断々乎（だんだんこ）たる行動であり、昭和俳句史の重要な一頁ではあるが、しかし事実そのことが重大であるというよりも、その事実の持つ意義こそが、俳句史的にはより重要なのである。昭和俳句の革新は、この精神から生まれた。

当時、秋櫻子先生や「馬酔木」の作風が、如何に美しく、如何に新しく、若い俳人たちの目に映ったか、如何に魅力あるものとして眺められたかは、今日の想像を絶するものがある。その門下から楸邨、波郷、窓秋、辰之助ら俊秀が輩出しただけではない。その頃の「馬酔木」を閲すれば、今日俳句界第一線に活躍する有力作家諸氏の名を、一句組二句組の中に多く見出すことができるであろう。そうした人たちが、秋櫻子先生の新しい俳句に憧憬し、これを支持して、新興俳句運動発展の原動力となったのである。

先生は、謹厳温和慈味豊かな人柄で、我から好んで人を攻撃したり人と争ったりする人ではなかった。が、俳句上の信念には、一徹と思えるほど強くきびしく、決して妥協されなかった。それが「ホトトギス」離脱ともなったのである。その一徹さは、先生の俳句の清純端麗さに見事に貫かれている。誠に印象的である。最近の作品は、淡々として水のごとく、かすかなること花の匂うに似て、かつての鮮烈な華やかさには欠ける。しかしこれは六十余年の俳句的歳月を賭けて至り得られた融通無礙な至境というべく、正に境涯に遊ぶの趣さえ感じられる。

一昨年講談社から『水原秋櫻子全集』全二十一巻が刊行され、昨年は明治書院から『季題別水原秋櫻子全句集』が出版された。私はそのいずれにも関与させて頂いたが門下にあらざる私が先生から頂いたご厚誼のかずかずは、私の忘却してはならない俳恩である。

謹んでご冥福をお祈りする。

（東京新聞俳句月評より抄出）

昭和52年6月10日、俳人協会顧問会に出席の秋櫻子先生

## 春夏秋冬

山口県の地図を開いて、東西南北の丁度どまんなかあたりに、その「やまめ庵」はある。あるじは数年前まで銀座のクラブでママをしていたひとである。

庵の前を流れているのは阿武川。川はやがて長門峡に入り、さらに北上して山陰の萩に抜ける。

流れのほとりには、えごの樹が繁り、合歓の花が咲く。双眼鏡ではるか山肌を覗くと、山法師の花や朴の花弁が認められたりする。

水はもとより清冽ではあるが、山女魚の養殖を成功させるには相当の苦労があった筈である。彼女は多くを語らない。二万尾の山女魚が清遊する水槽を朝夕せっせと掃除している。

裏山の麓は栗林につづいて広い蔬菜園だ。トマトが実り、きゅうりが垂れている。案内を乞うても女主人は畑にいる時の方が多い。料理の注文に囲炉裏から火種をとり出し、やおら炭を熾し始めるのだ。

庵は山口の造り酒屋の母屋を移した萱葺きの一棟。台所の土間は広く、漬物桶や味噌桶が並んでいる。縁側に座れば風は四通八達。ときに蜩の声がひびいてくる。

この庵のよろしさは、女主人のことさらに愛想を言わない点だ。今日は駄目と言われれば金輪際駄目だが、その代り手作りのつくだ煮を土産に呉れたりする。そんなとき、二人の子供を育て上げた彼女から、はずかし気な笑みがこぼれる。

器が全部萩焼きというのも、彼女の心意気であろうか。

（上野さち子）

---

## 第二十回 全国俳句大会御案内

◇**発表**＝九月二十六日（土）午後一時より
**ヤクルトホール**　東京都港区東新橋一−一−一九（入場無料）
**国電・地下鉄**　新橋駅下車五分

◇**賞**＝入賞者には文部大臣奨励賞・俳人協会・全国俳句大会賞・朝日新聞社賞・各選者の特選句には賞品。

◇**講演**＝東　明雅「芭蕉の恋句」
高木晴子「父・虚子の思い出」

☆なお、大会当日参会者より一句を募集、特選句には賞を呈します。（投句締切一時半・会費無料）

当日選者
沢木欣一　原　裕　千代田葛彦　成瀬正俊
柴田白葉女　鍵和田秞子（順不同　敬称略）

昭和五十六年七月

主催　社団法人　俳人協会
〒160 東京都新宿区百人町三−二八−一〇
俳句文学館内
後援　朝日新聞社

---

俳人協会主催

## 第8回 関西俳句講座

**期間**　8月29日～9月29日のうち五回
**会場**　大阪市天王寺区石ヶ辻町38の1
なにわ会館
（上六交差点を南へ百五銀行角東入る）
**定員**　百名
**会費**　〈一般〉　〈協会員〉
（全期間）四、〇〇〇円　三、〇〇〇円
（一日券）一、〇〇〇円　八〇〇円
**申込締切**　8月5日（定員になり次第締切ります）
**申込先**　〒665宝塚市野上四丁目8の22
俳人協会関西支部
**振替口座神戸・一八一一六**

会費同封（一日受講は曜日明記）協会員は姓号の肩に会員証番号を明記の上お申込み下さい。受講券・時間割をお送りします。
【**俳句講座賞**】全期間受講申込者に対し、初日に当季雑詠2句募集（誓子・青畝選）最終日に発表授賞。

| 時間割 | 13：30～14：40 | | 14：50～16：00 | |
|---|---|---|---|---|
| 8/29(土) | 現代俳句の用語 | 藤原　昇 | 見る・聞く | 山口　誓子 |
| 9/4(金) | 思想性と社会性 | 見市　六冬 | 虚子の教え | 土山　紫牛 |
| 9/12(土) | 叙情と叙景 | 鷲谷七菜子 | 芭蕉の教え | 阿波野青畝 |
| 9/18(金) | 俳句の中の古建築 | 尾亀清四郎 | 選句と鑑賞 | 下村　非文 |
| 9/29(火) | 俳句の表現 | 大橋　敦子 | 旅の俳句 | 岸田　稚魚 |

# 二十周年記念行事など意見を交換

## 評議員懇談会、幹事会

俳人協会では七月六日午後一時三十分より評議員懇談会を開会、協会の創立二十周年記念行事を中心として、各評議員と意見の交換をした。

**出席評議員**

今井湖峰子・勝又一透・勝又木風雨・小松崎爽青・近藤一鴻・柴田白葉女・島村茂雄・高橋春灯・高橋沐石・堤俳一佳・殿村菟絲子・西村公鳳・野竹雨城・不破博・細見綾子・山畑禄郎・有馬籌子（川瀬一貫代理）

執行部より大野会長・沢木副会長・草間理事長・古舘・鷹羽・原・村田各理事、皆川監事が出席した。

評議員会は午後一時三十分開会、大野会長より挨拶があり、つづいて草間理事長より二十周年記念行事の概要の説明があり、協力を求めた。一部の評議員より、記念行事に必要な経費は寄付を求めてはどうかとの提案があったが理事長から、現在のところ寄付を求める意向はない旨を表明した。更に第三種郵便物についての意見や情報を交換、特に地方の小俳誌の第三種取消しを免れるよう出来る限りの努力をという、協会執行部に強い要望の発言が多く、協会としても努力を約した。

**札幌より出席の勝又木風雨氏談**

「二十周年行事の講演と俳句の会の札幌開催は盛大にやりたいと思っています。」

### 業務など説明

### 幹事会

俳人協会では評議員懇談会開催のあと、同日夜六時より幹事会を開催した。

出席幹事は三十名。それに沢木副会長以下の各理事が出席、宮下事務局長の司会で開会。沢木副会長の挨拶のあと草間理事長が協会業務の概要を説明、つづいて、鷹羽理事より行事の内容を、原理事が名鑑について、村田理事が研修会などについて説明、出席幹事から活発な発言があり、午後八時半散会した。

### 第三種郵便物

### 認可点検

前号で報じた第三種郵便物の認可の点検について、郵政省は七月三日まで九八〇件の認可取消しを決定、それぞれに通知した。日本経済新聞（七月四日朝刊）の報ずるところは別表の通りである。

調査中の五九九件については七月中に結論が出る見込みである。

また、これらの取消し、または、調査中の雑誌に、俳句雑誌がどれほど含まれているのかは不明である。

**第三種郵便の見直し結果**（件）

| | |
|---|---|
| 【調査対象】 | 12,539 |
| 認可取り消し | 980 |
| うち１回の発行部数が1000部に満たない | 311 |
| うち無料配布数が発行部数の20％を超える | 660 |
| うち販売先が限定されている | 9 |
| 自主的廃刊 | 76 |
| 調査中 | 599 |
| 引き続き第三種扱い | 10,884 |
| うち改善命令をうけて修正した | 1,789 |
| うち改善命令をうけなかった | 9,095 |
| 【調査対象外】 | 2,526 |

## 京滋会員の集い来年五月開催へ

俳人協会では京都府、滋賀県在住の会員の集いを行うべく企画中だったが、昭和五十七年五月三十日に開催することで、会場の選定に入った。

去る六月八日、草間理事長が京都に桂樟蹊子、那須乙郎、津久間松翁氏らを訪れ、協力を依頼した。会場選定などは桂樟蹊子氏が当たることになった。

## 顔 ㊽

**野村　喜舟**

# 牡丹茫々ひたすら…

蝉のあと絶えんとして尚続く　喜舟
忘れ扇の京畳なり　瓢郎
鼻の穴たおやか風邪を引給ふ　喜舟

これは『僧形の八幡像やお元日　喜舟』を立句として此一月から文音で始めた歌仙での抜書である。先生は夜半に目が覚め易いので睡眠薬を用いられるが付句は三〇分から数時間をかけて考えたものを、長女のうららさんに代筆させて返事を下さるのである。式目に捉われずにピタリと据えられた付句に、筆者はドキリとしニヤリとし苦心惨憺して投函するのである。

先生は五月十九日で満九五歳になられた俳壇最長老で、目と耳が不自由な上高血圧のため近隣の散歩には、うららさんの手押車を用い、関門橋や紫川の鶯の句碑にはタクシーで出掛けられ句作を試みられた。在宅の時は辛夷、躑躅、睡蓮等庭の花々を眺め句想を練るのである。

松山での渋柿八〇〇号大会には『牡丹茫々ひたすら匂ひゐたりけり』の祝電を下さった。明治末年国民俳壇に活躍し大正四年東洋城先生が創刊した『渋柿』に最初から課題句選者として参加され、昭和二八年から五一年末まで主宰として幅広い選句態度で同人の指導に当られ現在の隆盛を築かれました。若い時の江戸前の名吟から近詠の枯淡に至る迄平明な表現の中に句材の汎さや情のこもった数々の句珠を作られて来ました。

前記牡丹茫々の句に見られる俳諧の滲みこんだ顔を凝視めて下さい。

（文・阿片瓢郎　写真・野村うらら）

---

図書室の『馬酔木』

# 滝氏の好意で完全に…

現在、俳句文学館に「馬酔木」は昭和七年以降昭和五十六年現在まで完備している。これは馬酔木同人諸氏が努力して欠号分を補充して下さったおかげで感謝しているところであるが　それ以前は昭和五年が三・八・十一・十二各月、昭和六年は六・九～十二各月があるのみで、改題前の「破魔弓」に遡って、すべて欠号となっているのである。「馬酔木」のような有力な俳誌の初期を欠くことは何とも残念なことであったが、最近、滝春一氏がそれらを所蔵していられることを仄聞し　同氏に借用を願い出たところ　快くご承諾頂き、且つはその複写の許可を得た。そこで馬酔木同人田中敦子氏の協力により、全頁のゼロックスコピーを完了、これを仮製本して書庫に収容する手続を進めている。

これによって「馬酔木」は、昭和三年七月改題以後（ただし、昭和三年九月のみ欠号）はもちろん、遡ってその前身である「破魔弓」も大正十五年一月号以後（同年二月号のみ欠号）「馬酔木」に改題まで完全に揃うことになって、今後ご利用頂く向きにも、喜んで頂けると思う。

これひとえに今は珍本となったご所蔵本を快く貸与され、コピーまでお許し下さった滝春一氏のご厚意の賜もので、綿密周到なコピーと照合の作業にご尽力下さった田中敦子氏のご労苦と共に、心から御礼申し上げる。

なお、「破魔弓」創刊号（大正十一年）から大正十四年までと大正十五年二月、「馬酔木」昭和三年九月号を持っておられる方のご連絡を是非お願いしたい。

（村山　古郷）

「馬酔木」初期の全巻と滝春一氏

**田中敦子さん談**

今回、この作業のお手伝いをさせていただきましたが、まぼろしの俳誌と思われていた「破魔弓」や創刊当時の「馬酔木」等とても貴重な資料の保存だと思います。昔なつかしい上製製本された本を見て、昭和の多難な時代を今日まで大切に保存されてきたご行為に、同じ馬酔木の末席に名を連ねているものとしてとてもうれしい気持です。昭和俳壇に近代的新風を吹き入れた先駆者、秋櫻子主宰にふさわしい清新でユニークな内容は俳壇・俳句史上参考になることが多いのではないでしょうか。

（七月十一日）

## 俳句文学館臨時休館のお知らせ

俳句文学館は次の通り臨時休館を致します。従って俳人協会も休みとなりますので、よろしく願上げます。

八月十三日（木）定例休館
八月十四日（金）から
八月十六日（日）まで　臨時休館

※図書室も八月十二日（水）から十六日（日）まで休務。

昭和五十六年七月
社団法人　俳人協会

---

# 地方組織のすすめ

## —宮崎県の巻

古舘　曹人

私は九州人だが、まだ一度も宮崎県に足を踏み入れたことがなかった。五月一日熊本飛行場から高千穂峡へ走った。

宮崎には二つの貌がある。一つは、高千穂峡、西都原古墳群、鵜戸神宮——いわば神の国。他の一つは日南海岸に作り上げられた南国ムードのレジャー地。私はもっぱら前者のコースをたどり、宮崎市内の城ケ崎俳壇の遺跡、俳人墓地を訪ねた。南国ムードの方は沖縄に圧されて、既に色あせている。えびの高原のみやまきりしまには少し早かったが、日向水木、野海棠、化偸草（えびねらん）、春りんどう、蝮蛇（まむし）草、舞鶴草、なるこゆりなど花ざかり。

私の宮崎旅行には吟行と別の目的があった。神尾季羊・久美子夫妻を中心にした俳人協会員と話し合うことであった。

今年度私は鷹羽、原、村田、森田各理事とともに組織担当の理事となった。地方組織の勢力拡大よりも、組織づくりに専念して、究極は地方支部組織を確立することを目標とした。各理事の分担。

北海道、東北、北関東—鷹羽理事
北陸を除く中部—原〃
関西—森田〃
北陸、中国—村田〃
四国、九州—古舘〃

先づ、県別の協会員名簿を作成して、仕事にとりかかり、その手始めに私は宮崎県を選んだのである。

ここは既に「俳人協会宮崎支部」と銘打って、二十八名の組織ががっちり出来ていて、九州ブロック大会、親睦吟行会、会員のつどいなどは実施済みで、地方支部の見本のようなところである。

五月二日夜七時、神尾夫妻・久保・鬼塚・田崎・山口・橋本・吉田・松田・芳野の男女十名が宮崎市在住の会員に青島のホテルに参集してもらって、卒直な意見を聞いた。

▽協会人事や俳句文学館の記事やカレンダーなど地方軽視が見られる。

▽「支部」を正式に認めてもらって、地方の意見を中央に反映したい。

▽支部組織ができると、中央への協力と支部独自の仕事の区分が出来て、活動しやすくなる。

▽県の俳句協会（三五〇人）があって、現俳協ともうまくやっている。——

天安河原（あまのやすがはら）で八百萬の神が相集い、相議（はか）ったように、俳人協会の問題について私を加えた十一名は真剣に話し合い、時を忘れて、神の国は九時を回っていた。（原文旧かな遣い）

---

第五回

## 東京大神宮観月祭俳句会

本年度の観月祭俳句会を次の通り行いたいと思います。お誘い合せの上、ご出席下さいますようお願い致します。

**日時**　九月十二日(土)　午後五時開会
**場所**　東京大神宮（国電・東西線飯田橋駅下車）
**会費**　千円（句会費を含む）
**講演**　草間　時彦
**選者**　岡本眸・神蔵　器・鷹羽狩行・村山古郷・山田みづえ（アイウエオ順）
◎尚、前日出句の部も選者は同じです。
**句会**　当日嘱目　二句
**祭事**　観月祭神事。入選句発表、賞状賞品授与。

**前日出句の部要領**

**会費**　千円を同封、三句一口として、何口でも応募出来ます。
**題**　「月」とかぎらず、四季を通しての雑詠
**用紙**　二〇〇字詰原稿用紙か便箋に（住所姓名を明記のこと）
**宛先及問合せ先**　〒102東京都千代田区富士見二－四
東京大神宮社務所観月句会係
電話（03）262－3566
**出句〆切**　八月二十五日（当日消印有効）
◎御応募の方全員に選句集をお送り申し上げます。

**主催**　東京大神宮
**協賛**　㈳俳人協会

---

昭和五六年度・特別講座（夜間）

## 「近代俳句の展開」第Ⅲ期

**現代俳句の歴史を学ぶ特別講座です**

**期間**　九月十六日～十一月二十五日まで六回
**会場**　東京都新宿区百人町三－二八－一〇
俳句文学館　電話　三六七－六六二一
**道順**・国鉄　大久保駅北口下車　徒歩四分
**会費**

| | （一般） | （協会員） |
|---|---|---|
| （全期間） | 五、〇〇〇円 | 四、五〇〇円 |
| （一日券） | 一、〇〇〇円 | 八〇〇円 |

**申込先**　〒160東京都新宿区百人町三－二八－一〇
社団法人　俳人協会「近代俳句の展開」係
会費同封（一日受講は期日を明記）
協会員は姓号の肩にその旨明記の上、現金書留でお申込み下さい。受講券をお送りします。
**演題**　講師ならびに時間割六時から八時半まで。

| | | |
|---|---|---|
| 9月16日(水) | 「臼田亜浪」 | 村山　古郷 |
| 9月30日(水) | 「久保田万太郎」 | 安住　敦 |
| 10月14日(水) | 「荻原井泉水」 | 上田　都史 |
| 10月28日(水) | 「長谷川かな女」 | 星野　沙一 |
| 11月11日(水) | 「飯田　蛇笏」 | 広瀬　直人 |
| 11月25日(水) | 「芝不器男・富田木歩」 | 草間　時彦 |

# 随想

## 蝉時雨

加藤憲曠

「降るような蝉の鳴き声をききたい。」

近頃無性にこのように思うことがある。二年前市役所を退職し心に余裕ができたためだろうとも思えるし、或いは老境に入りつつある者の過去への郷愁の故だとも思える。

蜩であれば、七月に入れば朝夕私の家の付近でもよく鳴いているし、裏山には、雉子・山鳥・山鳩もよく鳴いている。すぐ近くの奥入瀬川の付近では行々子がうるさいくらいだ。

しかし、不思議と蝉だけは私の周囲では、ここ三十年来聞いたことがない。妻に聞いても、そう言えば聞かないね、と私の関心に対して、さして同情を示してくれない。さすが俳句の仲間は別で、幾らかの関心をもってくれる。中には、どこかへ蝉を聞きに行こうか、と言ってくれる者も居るが、いまもって実現されないのは、それ程気乗りのしていない証拠である。

三年前、市役所の職員旅行で山寺へ行ったとき、久しぶりで蝉時雨に近い感じを味わった。この時は、すっかり嬉しくなり宿で痛飲した記憶がある。

最近では、昨年八月沢木欣一先生の句碑除幕式を兼ねた風大会で沖縄を訪ねたときは、ひめゆりの塔付近で本格的な蝉時雨の感じを味わい次のような俳句を作った。

蝉降るや哀話は島の隅々に
海底を見透してをり蝉時雨

私が小学校に入った頃毎年二、三回は私の家に立寄ってくれる京谷竹治という人が居た。私の母の遠縁にあたる人で東北電力株式会社北福岡発電所（現在の岩手県二戸市）の主任技師をしていて、当時とすれば私の家と違い裕福な暮しをしていたし、子供二人共女だったこともあって男の私をことの外可愛がってくれていた。父母は、この人をおどさん（旦那さん）と言って尊敬していた。私も子供心にいつも土産ものを呉れるこの人をおどさん、おどさんと言って絡まっていたものである。そういうことから小学校三年生ごろから夏休みになると必ず北福岡の発電所につれてゆかれるようになっていた。

この北福岡の発電所というところは、すぐうしろに五十米程の山が聳え、またすぐ前を馬淵川の清流が流れている景色のよい所で、私が夏休みで訪ねる頃は蝉時雨の真只中にあった。またおどさんの家から発電所までの約百米の道の両側には、さまざまな種類の桃が枝を撓うようにして私を待ってくれていたし、川には鰻や鯉や鮎などが豊富で釣りをするのも楽しみの一つでもあった。

こんなことが中学三年頃までつづき、おどさんが八戸の営業所に転勤するようになってからは二度とあの懐しい蝉時雨の雰囲気を味わうことができなくなってしまった。

四、五年前俳句の仲間と再び訪れたときは、既に県立公園馬仙峡として遊歩道や駐車場、ドライブイン等観光風に整備され昔日の面影はなく、蝉時雨どころか、やたらに自動車の走る音だけが耳にのこるところとなっていた。

---

# 互いに親睦を深める

## 第二回　福島県会員の集い

協会第2回福島県会員の集
講師

福島県会員の集いであいさつする宮下事務局長（中央）と細川氏（左）

梅雨たけなわの六月二十七・二十八日の両日、万緑に囲まれた磐梯熱海温泉「山荘よもぎ」で、協会派遣講師細川加賀氏、協会代表宮下翠舟事務局長を迎えて俳人協会第二回福島県会員の集いが開催された。

福島県では昨年いわき市で第一回県会員の集いが開かれたが、第二回の今回はさらに親睦を深められるよう一泊二日の日程が組まれた。

第一日目の二十七日は、講師両氏出題の「梅雨・栗の花・青蛙」による席題競詠が行われ、句会閉会後は懇親会で夜の更けるまで親睦を深めた。

◇加賀・翠舟両氏特選

栗の花羅へ仔牛の啼き集ふ　研二

第二日目の二十八日は、会員より出句された作品の互選ならびに講師選が披講され、講師選評と、協会の運営等についての報告がなされ正午散会をした。

◇互選高点

味噌倉の暗さへ通す木の芽風　梅子

（影山葭郎記）

---

## 八月集

**葭切ぐもり**　**那須　乙郎（京都）**

寞々の葭田葭切ぐもりかな
無雑作に積みて石賣るほととぎす
月見草どこかで歩み返さねば

**朝曇**　**野澤　節子（横浜）**

炎日の昏さそよがぬ青芒
木々の間の白光にあり朝曇
月の隅（くま）闇のこぶしのひきがへる

**鳥蝶**　**山岸　巨狼（札幌）**

葉桜や見事に折れて媼行く
毛たんぽぽ発てず冷夏は挨拶に
鳥蝶眼つむる其処に髯の玄

---

## 葦牙六百号記念大会

俳誌「葦牙」では、通巻六百号記念大会を六月二十一日開催した。

「葦牙」の前身である「時雨」が故牛島藤六主宰のもと札幌より発行されたのは大正十年二月であった。その後、長谷部虎杖子主宰を経て現在山岸巨狼氏主幹。

---

# 創刊号物語

〈45〉

## 馬酔木

瀧春一

## 新しき俳句運動

## の胎動を秘めて

「馬酔木」の前身は「破魔弓」である。私は大正十五年一月、水原秋櫻子先生の門下に入れて頂いたとき、先生が雑詠を選して居られる「破魔弓」に入会した。其の破魔弓は第五巻一号であった。発行人は佐々木綾華、発行所は其の宅である四谷の西應寺であった。創刊号は大正十一年だから、恐らく当時のことをご存じなのは秋櫻子先生の他には誰も居ないと思う。

大正十五年は天皇崩御で改元、翌年が昭和二年、翌三年の七月号から「馬酔木」と改題されたのである。発行・編集の仕事も手伝うようになった若い者は皆喜んだ。破魔弓なんて古臭いから名を変えて頂きたいと先生に頼んでいたからである。だが、「馬酔木をまともに『あしび』と読める人はあんまりいないだろう」「いや、これは萬葉集に出てくる花だ。これが読めないようでは俳句を作る資格がない」「馬が酔っぱらう木なんてなかなか新鮮だ」などという声があった。

「馬酔木」改題号の表紙

改題号の表紙は川端茅舎の描いた穂麦で題字も茅舎である。（馬酔木の表紙が豪華絢爛になったのは未だ三、四年先のこと）扉には、「改題の辭に代へて——馬酔木咲く金堂の扉にわが觸れぬ——秋櫻子」と書かれている。表紙裏には「秋櫻子選破魔弓俳句集、定価一円、句数六百、量を顧みず、質を以て俳壇に問はんとするものである」「水原秋櫻子著、近代句私鈔、定価一円、著者が愛誦措かざる俳句の解釈であり、一面にはまた著者の芸術観である」という広告が出ている。

文章には「京葉野球合戦記、小言幸兵衛述」というのがある。小言幸兵衛は無論秋櫻子である。東大医学部を中心とする俳句会の連中と、千葉医大の俳句会の連中との野球試合を面白可笑しく書かれたものである。東大方のメンバーの中に、京都から駈けつけた平畑静塔が左翼を守ることになり、大活躍する。「この人はじめ運動場へ駈けつけた時、君は野球をやるかいときくと、『久しく球を持ちませんが外野位ならどうにか』と言ふ。この謙遜さがあるから後のファインプレーが一際眼に立つ。模倣俳句ばかり作って居て、句会にのさばる者共と……幸兵衛老人いずこ如何なる場所でも小言をいふのが病らしい」という一節がある。富安風生先生が「俳壇人の文章と文壇人の俳句」というのを書かれている。其の結論の所を抜き出しみる。

「たとへば室生犀星の俳句——其の文章よりもいいとか言はれてゐるところの—ごときはホトトギス雑詠に投じたら恐らく一句の入選も覚束なからう—略—我々が文章の神様と崇めているところの芥川龍之介の俳句を読むに至っては坐ろに哀愁を催さざるを得ない」と。風生先生もまだ若かったと懐しく思われる。

馬酔木の改題号から俄かに活気づいて来た。馬酔木がホトトギスから独立して、秋櫻子を先登に、若者達に依る新しき俳句運動を起すその胎動がすでに感じられるのであった。

（七月九日入稿）

---

## 高桑義生氏を悼む

七月一日、京都の俳人、「嵯峨野」主宰高桑義生氏が逝去された。八十七歳。同夜自宅で通夜、翌二日悲しみの梅雨降る中に密葬がおこなわれ、六日、同氏の句碑がある洛西の名刹常寂光寺で告別式が執行され、梅雨晴れの下参集した四百人の会葬者の前で、京都市長、大野林火俳人協会長（桂樟蹊子氏代読）、理事村山古郷の各弔辞が捧げられた。

故義生氏は東京の人、「黒髪地獄」「白蝶秘門」等の作で大衆文芸作者として名声を馳せたが、後、京都に移り、洛中洛外の古刹名園に関する著述の外、俳句に打ち込み、「嵯峨野」に俳句的情熱を傾注して、文人的風格に独自の俳境を展開した。晩年は俳句に文学的生命を賭けた観さえある。

私は昭和初年からの交遊で、郷里京都に誠実飄逸なこの老友を、失ったことが惜しまれてならない。

（村山古郷記）

---

## 俳句文学館

## 寄贈図書二万冊目

# 本宮氏に記念品

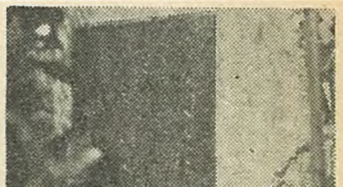
六月八日、俳句文学館の蔵書（図書）は二万冊を突破した。二万冊目にあたる図書は、本宮鼎三氏から寄贈された氏の句集『鬱金』で、これを記念し、同氏に対して記念品を贈り、謝意と祝意を表した。

本宮鼎三氏は静岡県住、俳誌「鮭」の同人である。『鬱金』所収の一句。

道連れにして春寒の影法師　（村山古郷）

---

## 野竹雨城の句碑



茨城県北相馬郡の藤代俳句会では、講師の野竹雨城氏の句碑を藤代町中央公民館に建立し、四月二十六日その除幕式を行った。

句碑は、笠間市稲田産の自然石ミカゲ石で「たんぽぽに照る陽曇る日陣屋跡」という自筆の句が刻まれている。（写真）

少年時代、野口雨情ら短詩型文学に傾倒し「ぬかご（枯野）」を経て、現在四十四年に復刊した「古郷」主宰。句文集「竹の季節」がある。

---

## 自註現代俳句シリーズ

**第Ⅳ期　五十五冊**

青柳志解樹・阿部慧月・雨宮昌吉・有馬朗人・五十嵐播水・石井桐陰・市村究一郎・伊藤柏翠・伊藤通明・今井つる女・岩下ゆう二・有働　亨・大津希水・岡田貞峰・岡部六弥太・小原啄葉・神尾季羊・神尾久美子・神蔵　器・菊池麻風・岸田稚魚・古賀まり子・児玉南草・佐野美智・猿橋統流子・清水基吉・小路紫峡・鈴木栄子・角田拾翠・高島筍雄・高橋沐石・武田無涯子・谷野予志・土山紫牛・那須乙郎・成瀬正俊・林　徹・原　柯城・樋笠　文・平井照敏・福原十王・星野紗一・細見しゆこう・本多静江・松本　旭・三浦恒礼子・皆川白陀・三好潤子・村上冬燕・村沢夏風・八木沢高原・山崎ひさを・吉野義子・鷲谷七菜子　（五十音順・敬称略）

装本、編集などすべて第Ⅱ期に準じます。昭和五十六年六月発売以後毎月三冊の予定にて刊行　一冊一、〇〇〇円（送料二〇〇円）

**※一括申込みについて**

六月に第一回が発売されてから全冊一括申込みの希望が多く寄せられていますので、払込の便宜のために次のように定めました。ご利用の程お願いいたします。

**三十冊一括申込みの価格**　三万円（送料共）

※この場合、著者指名でなく刊行順に三十冊お送りします。

〒160　東京都新宿区百人町三—二八—一〇
申込先　社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六二一番
振替　東京　六一二七三番

---

## 俳人協会北陸会員のつどい

**日時**　九月二十七日（日）午後一時
**会場**　富山市呉羽山頂「竹亭」
〒930-01　富山市茶屋町ノ下九〇
電話〇七六四—三一—五四三五
富山駅よりバス③高岡、小杉、新港東口行
④花ノ木経由太閤山団地行呉羽山公園下車
又は④観光センター行終点下車
**協会講師**　古舘曹人
**句会**　嘱目二句投句締切午後一時、互選
会費無料　会員に限る
**懇親会**　午後五時～七時　同会場にて
会費六千円
**参加申込**　九月十五日まで
**申込先**　〒930-二　富山市本郷新二九　吉沢卯一
電話〇七六四—二三—二二（自宅）
〇七六四—二一—八七三三（医院）
（註）当日宿泊希望者は申込みのこと。

# 俳句カレンダー鑑賞

「鎌倉句会。雨降りだったので円覚寺まで登らず中村七三郎さんのお宅をお借する。楽屋入りの時間迄、七三郎さんも一緒に句作される。」と自註にある。昭和十二年の作品。

赤のまゝはひなびたどこにもある花。この句は先生が、ふと黙っているところに、人が話しかけて来た、そのどこにでもある感じ、その感じを、赤のまゝと下五において、不即不離に、その時の作者の感じを述べているものである。

日常的なものの中に俳句ならではの詩情をこんこんと湧き出させている。それは作者の感情が素直で透明なためである。

〈八月〉

我黙り人はなしかく赤のまゝ　星野　立子

「自然の姿をやはらかい心持で受取ったままに諷詠することは立子の句に接してはじめて之ある哉といふ感じがした。」昭和十二年発刊の「立子句集」の序文で虚子先生が述べておられるが、その中で「口ごたへすまじと思ふ木瓜の花」（昭和七年）のように「木瓜の花を見てゐて、ふと何のことなしにでまかせに浮んだ考えを入れて見て案外木瓜の花にしっくりした気分があると思った。」と自解されている、心持と季題とがマッチした新しい俳句が生れて来、さらに「父がつけしわが名立子や月を仰ぐ」「考へても疲るるばかり曼珠沙華」「暁は宵より淋し鉦叩」（昭和十年）の感情が土台になった句の方向が出、さらにこの赤のまゝのような、自然のままで、そこに微妙な感情が生き生きと流れる俳句を作られるようになっている。こうした自在さというものは修練の結果であり、先生の天稟によるものであるが、季題発想の花鳥諷詠の一つの典型をなすものである。季題――自然と心が一つに通い合わねばこのような句は出来ないし、単なる配合に終ってしまう。

昨年喜寿を迎えられ、今年「玉藻六〇〇号記念大会」も盛大に終り、先生の俳句への情熱は、御病気を克服して益々高まっておられる。左手のお字が一段と品格と大きさを示される昨今。

（深見けん二）

---

# 夜店のおもちゃ

## ＞4＜

## 針金細工

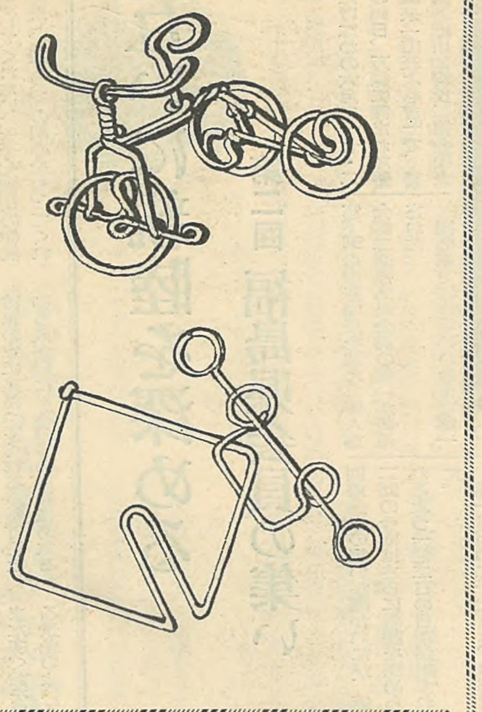
夜店商人の間では、普通大きな屋台店を張って多種類の商品を売る業者を「サンズン」の者と呼び、小さな台で一、二種の品を売る業者を「コロビ」の者と呼んでいるということだが、面白くて、珍しくて、安価というのが夜店の玩具の特色とするならば、それはもう断然「コロビ」の人達の持ってくる物だ。そして最近殆んど見掛ける事のなくなった針金細工などはその代表的なものだろう。

地面に敷いたシートに座り、ペンチ一つと針金をくわえる鉄の円筒だけで、輪ゴム利用の三、四米走る三輪車やサイドカー・オート三輪・飛行機・ピストル・智恵の輪といったものを次から次へと作り出す針金細工屋は子供の目から見るとまるで魔法使いであった。

その針金細工の中に、十センチ程のねぢりん棒を二本つなぎ、左右の手で両端を持ち、伸ばせば伸びて、縮めれば縮む（ように見える）細工物があって、私はこれが一番なつかしい。

仕掛けは簡単で、不思議で、面白くて、何より嬉しいことは二、三銭という安価な点で、これは、芸人の言葉で「セコジャリ」としか呼ばれない私達には三輪車や飛行機は高嶺の花、こんな物しか買えなかったからである。

【絵と文・杉山芳之助】



---

# 文芸美術国民健康保険組合加入のお勧め

頭書の組合は、丹羽文雄理事長の下に、設立以来、堅実なる歩みをつづけて明年三〇周年を迎えます。現在加盟四七団体、組合員二二〇〇名（家族二六〇〇名）のうちの、俳人協会もその一つで、現在約一〇〇名の協会員が家族と共に加入しております。

保険料は、組合員の収入の多い少ないに関係なく均等です。

組合員　一人月額　七八〇〇円
家　族　同　三八〇〇円

保険給付については
イ、療養の給付（法定）
ロ、給付割合　七割
ハ、結核・精神病一〇割給付
ニ、高額療養費の支給（法定）

その他、助産費、育児手当金、葬祭費の支給など、詳細についてはお問合せあればお答えします。

◇加入方法

協会員であればどなたでも組合員になれますし、家族も加入出来ます。お申越し次第必要書類をお送りいたします。

俳人協会・健保係

---

## 宇和の海岸に建立

## 坂本碧水氏の句碑

坂本碧水氏の句碑が、愛媛県宇和郡のリアス式沿岸に建立された。

風薫る五月、西海の景勝の地に

寒涛の句数多詠み捨て
　郷を出でず

と刻まれた、三間産安山岩、文字面黒色磨きで三トン、碑高二㍍のものである。

氏は「石楠」臼田亜浪に師事、現在は「航標」同人。著書に、句碑の句が収められている「酌むや自愛」他「涛」、「旅」等がある。

---

# 高齢者俳句の殿堂に

## 第一回『年の花』関西

## 地区指導講師連絡会

なごやかに開かれた「年の花」関西指導講師の連絡会

第一回〝年の花〟関西俳句指導講師の連絡会は、梅雨の晴れ間の六月十七日、大阪市立労働会館で開催された。本部より皆吉年の花委員長、三ケ尻年の花委員、関西支部より森田協会理事、浦野協会幹事、西矢年の花委員を初め岸本白霧講師他十四講師の出席を得て、なごやかな会合であった。

午後五時、西矢籟史、三ケ尻湘風両氏による司会で開会、三ケ尻氏の開会のことばに続いて、皆吉委員長より関西地区の講師諸氏の平素の施設での俳句指導に、協会よりの感謝の旨挨拶があった。年の花委員会の事業推進の中心事業である俳誌〝年の花〟の発行について、本年度よりの自主的経営に依る発行となるに当り、一般俳句雑誌に劣らない内容と外観を充実してゆくこと、更に全国高齢者俳句の殿堂たらしめたいとの抱負を述べられ、第一線で活躍される講師の全面的協力の要請があった。

続いて関西支部事務局長として森田峠氏の挨拶があり、関西地区年の花事業は、人を得て、支部の手を煩らわすこと少なく、多彩な事業に依る効果を挙げている旨の内容であった。

三ケ尻湘風氏の年の花委員会の事業報告、本年度の事業計画の報告の後、各講師の活動報告で連絡会を一応終了、引続き、なごやかな懇親会となった。各講師よりの本部への希望事項など忌憚のない意見交換がなされ二時間にわたる懇親会に名残を告げた。

第一回の連絡会の運営は西矢籟史、斎藤桃里、長井貝泡の三講師に依って行なわれた。最後に皆吉委員長より、しめくくりの言葉として、今日の諸意見を参考に、年の花事業の一層の発展の為にお互いに努力しようとの力強い発言がなされ、有意義な連絡会の幕を閉じた。

（長井貝泡記）

---

## 明治記念館で盛大に

「青樹」四〇〇号記念
全国記念俳句大会

「青樹」（主宰・長谷川双魚）は、六月号をもって創刊四〇〇号を迎えたので、東京都永田町ホテル・ニュージャパンにおける前夜祭に引続き、六月七日、神宮外苑の明治記念館において、全国俳句大会を開催した。

当日は天候に恵まれ、全国五十の支部から三五〇名参集したが、殊に、カリフォルニア支社を代表してアメリカから遥々出席したガルシア繁子氏の端麗な容姿が錦上花を添えた。

午前十一時開催、主宰の挨拶などを行った。

午餐会に移り、劈頭、師系飯田龍太氏の「祝辞」を同人佐々木菁子氏が朗読し、中田六郎氏より主宰の叙勲（勲三等瑞宝章）に対するお祝の記念品が拍手のうちに手渡され、久々子夫人に花束が贈呈せられた。

つづいて余興の後、午後の部に入り、午後五時盛会裡に散会した。

（石原　秦子記）

---

## 謹悼

次の方々が物故されました。謹んで哀悼申し上げます。

昭和56年
渡辺夏舟（4・29）春燈
久下説文樓（5・9）かつらぎ
廣瀬美津穂（5・19）ホトトギス
北村雨烏（5・31）雪解・いてふ
須藤紫峰（6・5）河
安井道子（6・19）狩
高桑義生（7・1）嵯峨野
佐藤棘矢（7・14）夏草
水原秋櫻子（7・17）馬酔木

---

## 編集室から

▽…水原秋櫻子先生が亡くなられた。初心の一時期を「馬酔木」で勉強した身にとって殊更に哀悼の思いでいっぱいである。私が初めて「馬酔木」を手にしたのは、昭和十一年の暮、浅草仲見世の清水屋書店で、表紙絵の美しい既に一五〇頁余の大雑誌であった。その作風に魅せられていた私はすぐ入手し投句した。そして翌年二月号に二句入選の栄を得た。しかし病後の身で一年足らずで止めた。

▽…十七年投句復活、戦中戦後特に銃後の産業戦士を詠んだ作品を幾度か取上げ評して載いた。そうした恩情を受けながら「馬酔木」を去らざるを得なかったのは、その頃私の周囲に「若葉」の多くの人達による固い絆が結ばれていたからであった。その後長い間心にわびつつ今日に至った。いま謹んで霊前に伏しご冥福を祈る次第である。

（宮　下）

▽…今月は悲しい知らせがトップを飾ることになってしまいました。心からご冥福を祈ります。来月は臨時増ページとし、故水原秋櫻子名誉会長の特集を組む予定です。

▽…思いのほか早い梅雨明けに喜びも束の間、三十度以上の猛暑と雷雨が続く毎日。夜間講座の近代俳句の展開も最終日には雷雨のため交通がストップ――それでも熱心な渋柿の方達が来て下さり無事II期を終えました。白いてっぽう百合が咲き始め夏も本番です。

（吉　野）

梶鞠や金の菖蒲を画きし袖　誓子

---

『自註現代俳句シリーズ』より抜粋

第四期『清水　基吉集』より　昭和二八年作

ゑのこ草貧中子守唄やさし

貧中なんて、いまは通用しないだろう。然し、そんな時代と、生活であったのだ。そんな生活の中での「母子像」だ。

同『角田　拾翠集』より　昭和四五年作

女教師に縁談二つ休暇明け

娘が大学を出て女教師になった。その始めての夏休に早速縁談があって、ぐずぐずしている間に二学期が始まり、学校へ出るとまた別の話があった。

同『本多　静江集』より　昭和五五年作

落し文樹下は文筥のごと暗し

落し文とは優しい命び名である。その落し文の置かれている樹下は、まるで文を納める文筥の中のように静暗。

九月刊

〈第三期〉　宮下　翠舟集　村田　脩集
〈第四期〉　菊池　麻風集　福原　十王集

自註現代俳句シリーズ

第III期　四十冊

既刊（五十音順）赤松蕙子集・磯貝碧蹄館集・上野章子集・浦野芳南集・江口竹亭集・大竹きみ江集・勝又一透集・きくちつねこ集・京極杜藻集・草間時彦集・近藤一鴻集・佐野まもる集・貞弘衛集・下村非文集・下村ひろし集・瀧春一集・瀧澤伊代次集・殿村菟絲子集・鳥羽とほる集・中西舗土集・長谷川双魚集・原コウ子集・平井さち子集・深見けん二集・福本鯨洋集・皆川盤水集・村上しゅら集・村山古郷集

続刊（五十音順）稲垣きくの集・大島民郎集・加藤三七子集・津田清子集・林翔集・細川加賀集・宮下翠舟集・村田脩集・八木林之助集・山口草堂集・吉田鴻司集・米沢吾亦紅集

装本、編集などすべて第II期に準じます。昭和五十五年六月発売以後　毎月三冊の予定にて刊行　一冊　八八〇円（送料二〇〇円）全四十冊一括申し込みの場合　三万三千円（送料共）

〒一六〇　東京都新宿区百人町三―二八―一〇
申込先　社団法人　俳人協会
電話　〇三（三六七）六六二一番
振替　東京　六―一二七三番